

第四編 苦闘

堅忍不拔

「人生は苦なり」とは釈尊の第一提言であった。頭から人生は苦しいところだと悟ったがいい。釈尊の不滅の法悦は、ここから生まれたのであった。ただぼんやりと、この世は楽しいのが当然だなどときめてかかるから、愚痴が出たり疲れたりするのだ。何もしない楽隠居にも、夏は暑いし、冬は寒いのだ。ましてや、酔生夢死から立ち上がって使命の上に生き、何事かを成就して行こうとするのに、苦しいことがあるのは当然ではないか。

何事かを成就しようとする。必ず、そこに障害が現われて、その行く手をふさぐ。内への教養でも、外への努力でも、必ずそこにこの岩壁が現われる。真剣な人ほどそれを見る。私はいつも、これを「宿命の岩壁」と名づけてきた。人生の生き方はここで決定する。

その宿命の崖の前で、涙にぬれて立っているか。単なる感情ではそれは解決しない。受けたはずの教育が、学識がちつともものをいわない。そうだ、単なる智識はそれを解決しない、しからば何が解決するのだ。

金剛の信念に裏付けられた、堅忍不拔の意志が、この岩壁を打ち破り、この荊茨いばらの道を打ち開いて進むのだ。

もちろん、知の明と、情の円満とを欠いた、単なる意志はありえないが、鉄のごとき意志を欠いた人間、いわゆる、薄志弱行の徒に何ができようぞ。古往今来、意志の弱かった聖者、偉人、英雄を一人でも見い出すことができるか。

だが、堅忍不拔の意志は、決して畳の上で考えていたのでは生まれえない。温室の中で育てられていたのでも出来てこない。火の中に、氷の中に、七転八起、練りに練られて初めて生まれてくる。

大正八年一月、広島県安佐郡飯室村小学校の粗末な宿直室で、「光明」の第一巻第一号が謄写刷で生まれた。彼は広島市から六里の一寒村に小さい芽を切ったのだ。

たった三四十人の若人たちの手に光明が行き渡った時、たちまち一村の若人たちはせ参じた。けれども、彼の使命は決して今日のごとく大きなものを期待されてはいなかった。一村の問題であり、青年仲間の小さい営みであった。

私は今二十年前の私を思い出す。

人生の無常、大地の矛盾、生きることの淋しき、そうしたもののが私の上に、苦悶と読書、不平と沈痛、自暴と努力、卑怯と我慢、暗黒と焦燥等々の一切をもたらした。だが、生命の内奥に動く何ものかが私をついにこの暗黒からつれ出した。二十四歳の夏、信の火はかすかに点ぜられた。私は初めて生きることの歓喜を知った。二十五歳の早春、雪が毎日降りつづく寒い日、彼の胸の炎は、このささやかな「光明」第一号となつて生まれたのだ。意義ある人生を歩みはじめたのもこの時からであり、苦闘の人生の歩みが始まったのもこの時からであった。

それ以後、私に一日だって絶対に必要だったものは、堅忍不拔の意志だった。

貧しい私は紙を、謄写器を買わねばならなかった。手伝つてくれる人さえいない時には、ローラーを持つ手には、豆ができ、それがつぶれて血がにじんだ。

三周年大会がすむと、光明は活版刷となった。私のわずかな俸給の何分の一が印刷費に、そして残りは、父への手伝いと、弟の学資とに送って、私は毎月十円で生活した。一足の足袋で一冬をすごし、裏のない洋服で三冬を忍んだのもこのころのことであつた。

反対がある、問題がおこる、毎月の印刷費が借金となる。もう動けない。幾多の苦難がつぎつぎにおしよせる。もうこの月限りでやめるのだと幾度行きづまったか知れなかつた。だがその度ごとに、

「念願は人格を決定す、継続は力なり。」

この信条からおこる声が私を起たせた。そうして不思議に新しい道が開けた。

私が読書に没頭したのもこの数年間だつた。午前二時、三時の起床、寢床をとらない幾夜、風呂にすら入らない幾週間。私にとつての懐しい絵巻物である。

社会に何の反響もないかに見えた光明団の上に、大正十一年の暮から十二年の春にかけて、大きな試練の日がきた。五年たつた時、もはや一村のものではなかつた。村はだんだん団の主張に耳をかたむけ、毎月の例会は、幾百千の人で満堂立錫りつすいの余地もないくらいだつた。青年男女が信仰求道の旅に出発しはじめた。私は日曜毎に、広島市その他に講演に出なければならなかつた。光明誌もまた全国の各県に出していた。

大正十二年四月一日から三日間、仏教済世軍主管、故真田増丸先生を講師として五周年大会は挙行された。真に拳村一致、村の公職にある人、有志は役員となり、全村二百五十戸、二日間の仕度に出てくれ、ついに白熱の大会は切つて落とされた。春だ！長い忍苦をおわつた光明団にも、春がきた。各地の支部は参加して、幾千の大衆がはじめて見るこの輝かしい空気に涙した。

しかしその大会の終わるか終わらぬかに、青い魔の手は動きはじめた。そしてついに四月、五月、六月、迫害、非難、悪罵、功撃と、援助、賛嘆、激励、援護との大うず巻きの中に立たねばならなかつた。ああ、涙ぐましい人間性の誠を見たのもこの時であつた。社会の底に動く恐ろしい毒牙の正体を見たのもこの時であつた。捨てようか、光明団を捨てようか。だが、それははつきりした問題だつた。私にとつては、教育と宗教は不可分のものである。大正十二年七月、私は私の衷心の願いのまにまに、聖典と、念珠をにぎりしめて、念仏しつつ濁乱のまっただ中に飛び出した。何たる冒険ぞ。

その年の暮れ十二月、故郷の一家をたたんで、父と母と、弟妹らを広島市につれ出した。何のよるべもない生活難の街に、さながら喪家そうけの犬のように食うにも困る日が続く。

それからすでに十年間、赤手空拳、奮闘また奮闘、東奔西走の中に光明団もすでに十五歳にまで成長した。

だが、この十五年間は決して私の努力が成就したのではない。その時その時に現われた同胞たちが、私を援け、私とともに苦闘し、光明団のために捧げられた真実が、

私によって代表されたのに外ならない。思いは長し。涙は深し。ただただ合掌あるのみ。

苦杯か甘露か

人生は苦痛である。だがその苦痛に二種類がある。(一)無自覚の苦痛と、(二)自覚の苦痛とがそれである。

無自覚の苦痛とは、無自覚からおこる苦痛、ならびに無自覚なるがゆえに感ずる苦痛である。

自覚ある生活をする者にも苦痛はある。しかし自覚者の苦悩苦痛はこれあるがゆえに人生の生きがいを感じ、かえってさらに生活のよろこびを感ずるのである。

貧しいということは確かに苦痛である。意味もなく非難され攻撃されることも苦痛に違いない。だが、富むということを生人の主目的におかず、大いなる使命に生きんとし、大法伝道のために自ら求めた貧しさであるならば、貧しさと戦いつつも、さまで苦しみとは感じられない。万人が低い文化の中に迷いの夢をむさぼる時、正法の旗高くかざして絶叫すれば、迫害攻撃のくるのは当然である。だが、その苦痛は決して無自覚の苦痛と同一ではない。

日蓮聖人は日蓮上人は、南無妙法蓮華経を絶唱して、眠れる民衆に一大警告の鐘を打ち鳴らした。当然来るものすごい迫害攻撃の雨霰、彼はついに、死刑の宣告を受けて、瀧の口の刑場にひかれた。刑吏は剣をとって立上る。

「南無妙法蓮華経！ なぜ斬らぬか。斬れ、日本一の法華経の行者日蓮が頭をはねて、汝が面目とせよ！」

端座瞑目、南無妙法蓮華経の高唱、幾度か振上げる剣、何故に斬下せぬのか。首の座に坐つてのこの金剛不壊の信、我が日本の柱である。我が説く道を聞かざれば、まさに国難到来せん。よしこの首をはねらるゝとも、この金剛の志の奪わるべき。ああ、偉大なる哉、信念の力！ この人を斬り得る刃あることなし。見よ！ 忽然としておこる一陣の暴風、天地にわかには暗黒、怪雲うずまくと見るや、電光ものすごくひらめきて、刑吏の目はくらみ足はもつれ、白刃たちまちに折れて、日蓮上人に一指だもさすことは出来なかつた。

念仏門の上にも試練の日は続いた。院の女官の剃髪、叡山南都の弾効、あわれ法然上人は土佐へ、親鸞聖人は越後へとご流罪は申し渡され、住蓮坊、安樂坊その他は死罪となる。

「師の坊よ。今しばらく念仏をおひかえ遊ばせ。しからば、上のご勘気も薄らぎ、大衆の心もおちつきましよう。ご老体のおん事も気づかわれます。」お聞き遊ばした法然上人は何と言われたか。「何を言うのであるか。配所の月をながむることは、聖者の常である。法然はたとい、死罪に行なわるとも念仏を停止すべからず。法然が私に称うる念仏にはあらず、釈尊ならびに諸仏の教えたもう道ではないか。」師と別れて北越の天地に赴きたまいし親鸞聖人は「大師聖人源空もし流刑に処せられたまわらずば、我また配所に赴かんや、もしわれ配所に赴かずんば何によつてか辺鄙の群類を化

せん、これなお師教の恩致なり。」と身にしむ配流の痛々しさの中にも、法悦の微笑は生まれていたではないか。

松陰 安政の大獄は、国士吉田松陰をも死刑にした。

「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」

「親思う心にまさる親心、きょうのおとずれ何と聞くらん。」

男子、涙なきにあらず。人間、苦痛なきにあらず。ただ国家の大事をいかにするかくすればかくなるものとは、あまりに明白な予感である。だが剣が待つからとて、この大和魂の雄叫びをおさえることができるか。

世の凡情あるいは言うかもしれない。「こうした人々の苦しみは、意味があります。が、私どもの苦しみは、全く無意味の苦しみですから、力が出ませぬ」。何たる愚で。病む子のために苦しむ親、頑固な姑に仕える嫁、道楽な夫に仕える妻等々の苦しみが一切無意味だということか。

キリストの十字架、日蓮、法然、親鸞等の流罪攻撃に何の意味があったか。みな、無意味といえど無意味である。その無意味な苦痛を避けて、たちまち妥協し、個人の安全に走れば、無意味の苦はさらに無意味になってしまう。苦に意味があるのではなくて、生活に意味があるのだ。使命のためには、一貫した生活が把持される。一切の苦悩を起えて、一貫した大道を歩む時、無意味な苦痛が意味を持つてくるのだ。一切の苦悩に価値あらしめるか否かは、その生活のいかんによるのである。この意味において、一切の苦悩、苦痛にして、無意味、無価値のものあることなし。

釈尊は、一切の苦は、煩悩より生まれると説かれた。苦を解脱せんとすれば、苦の根源であるところの煩悩の正体をつかめ。煩悩の正体をつかむところに、智慧光が輝く。智慧光によつて煩悩の正体をつかむとは、煩悩に使われていた生活から、煩悩を使う生活に転換することである。「心を師とすることなかれ。心の師となれ。」煩悩に使役せられるのであれば、煩悩は強くてはいけない。煩悩を使役するのであるならば、煩悩は強いだけい。

煩悩を使役する生活に至れば、一切の苦痛は変じて、甘露となる。大道に生き、使命に生きるものみに許される特権である。

利己主義の我利我利より、大乘菩薩道の無碍道に入れ。

感覺的享樂の麻酔よりさめて、群生の前に一切を捧げよ。

苦闘は変じて歓喜となり、苦杯は変じて甘露となる。

我等の一死団結の歩武はこの人によつて強きをなす。

大乘仏教の伝持はただ、この人によつてのみ可能である。殉教の血盟光明団の使命は、ただこの人によつて成就せられる。

光明団 スピリット 魂

其静如林 その静かなること林の如く

其速如風 その速きこと風の如く

侵略如火 侵略火の如く

不動如山 不動山の如し